

## 妙法山阿弥陀寺

阿弥陀寺は海拔 749 メートルの妙法山の中腹に位置する真言宗のお寺です。阿弥陀寺の開創は、空海（弘法大師）がこの山で修行を行った 815 年にさかのぼります。空海は阿弥陀如来像を安置するため小さなお堂を立てました。阿弥陀如来は、信者が死後に生まれ変わる西のかなたの浄土に住まう仏です。熊野はこの世とあの世の境界域であると信じられており、その終端である阿弥陀寺より向こうには死後の世界が待っているとされていました。

熊野詣を済ませた参詣者は皆、ある意味で生まれ変わった存在でした。Resurrection にあたる日本語、「よみがえり」は「黄泉の国から還る」という意味ですが、熊野を参詣した人が体験したのはまさにこれでした。参詣の旅は、数週間、時には数ヶ月間にわたって黙想しながら歩き続けることを意味したため、故郷に戻るところには多くの参詣者が別人のようになっていました。

### 妙法の山

妙法山の名称は Lotus Sutra の日本語の正式名称である妙法蓮華経に由来します。この名は、山頂に経典の写しを埋納し、木阿弥陀如来の像を彫った蓮寂という僧侶によって 703 年につけられました。日本の多くの山と同様、妙法山は神（この場合は仏）とされています。妙法山と阿弥陀寺の伽藍は、『那智参詣曼荼羅』の左上に描かれています。

### 霊が撞く鐘

阿弥陀寺の入口には、朱塗りの木造鳥居と柵が立っています。通常、神社の敷地の境界を示すこれらは、阿弥陀寺では習合的な熊野信仰において仏教と並んで重要とされる神道への敬意を示すためにあえて置かれています。鳥居をくぐった左側には、1678 年に再鋳された「ひとつ鐘」が吊り下げられています。日本の亡者の魂は皆、この世を去る前に一度だけこの鐘を鳴らすため、誰も撞く人がいないのに鐘の音が響くことがあると伝えられています。

### 本堂とお髪あげ

入口の真正面には本堂があり、この寺の本尊である阿弥陀如来が祀られています。本堂の外階段の屋根を支える柱には、獺という悪夢を食べる伝説上の生物の彫刻が施されています。この本堂は、「お髪上げ」の遺髪・遺骨が納められる場所です。

平安時代（798–1185）に始まったお髪上げは、参詣者が死後に西方浄土に生まれ変わることを祈願して自分の頭髮の束を寺院に納める風習です。後の鎌倉時代（1185–1333）には、人

々は亡くなった大切な人の遺髪や、時には遺骨を納めるようになりました。この風習は現在でも続いています。

阿弥陀寺の境内には、この寺の鎮守である三宝荒神の像が安置されているお堂と旅人を見守る地藏菩薩の像が安置されているお堂もあります。

### 応照の火生三昧

境内の開けた草地には苔むした石が並んでいます。これは、10世紀か11世紀初期頃に応照という名の行者が自らの身体を焼き尽くす「火生三昧」と呼ばれる行を実践した炉の跡です。応照に感銘を与えたのは、法蓮經の一節にある衆生を救うために自らの身体を焼いた菩薩でした。この火生三昧の記録には、応照は炎に包まれても法華經を唱え続けたと記されています。

### 奥の院と熊野比丘尼

境内の奥には、妙法山のさらに高いところにある阿弥陀寺の奥の院へと続く階段があります。奥の院は、日本各地を旅して熊野三山への参詣を勧進していた熊野比丘尼（尼僧）たちと密接な関係があり、女人高野と呼ばれていました。高野山自体が女性の立ち入りを禁じていた当時から、全ての人を迎え入れることは熊野信仰の中心的な信条でした。